

のさり

永田円了

Accept What is Given

のさは偶然か、必然か ----- 失うものと、得るもの

人生には、自分の意思とは無関係に訪れる出来事がある。思いがけない病、望まなかった異動、避けられなかった別れ。私たちはそれらを、しばしば「偶然」と呼ぶ。なぜ自分が、なぜ今なのかと、理由のなさ戸惑うからだ。しかし日本語には、そうした出来事を受け止めるための、すこし変わった言葉がある。「のさり」である（熊本地方の方言）。



のさりととは、降ってきたもの、授かったもの、避けようのないものを指す言葉だ。そこには、偶然か必然かを即座に決めない態度が含まれている。説明できない出来事を、無理に意味づけせず、「これは私にきた」とだけ引き受ける姿勢である。

のさは、偶然か、必然か。理屈の上ではどちらとも言える。原因と結果を辿れば必然に見え、当事者の実感からすれば偶然にしか思えない。しかしのさりという言葉は、その二分法の外に立っている。問いは「なぜ起きたか」ではなく、「それと、どう共に生きるのか」へと向かうからである。

のさを引き受けた瞬間、人はまず何かを失う。思い通りに生きられるという幻想、努力すればすべて報われるという信念、自分が人生の完全な主人公であるという感覚。それらは静かに崩れていく。しかし同時に、人は別のものを得る。世界は完全にはコントロールできない、という事実と共に生きる自由である。起きてしまったことをなかったことにせず、よし悪しの判断を急がず、「この現実から始める」という足場を得る。そこから生まれる行為は、以前よりも遅く、控えめかもしれないが、どこか深い。



仏教では、出来事の意味は最初から与えられないと考える。意味は、耐え、迷い、歩き続けた時間の中で、後から立ち上がってくるという。私事ながら、宗教色の強い自分の名前が嫌だった。仲間はずれの元にもなった。禅僧だった父の意に反して、繊細な子供の心はずっと傷ついていた。喜寿をこえた今、やっと自分の名前に託された意味が身体に溶け込んでくるのを感じる。のさりととは、その時間を生きる覚悟の別名だったのかもしれない。

偶然でも必然でもないものとして、人生は私たちに降ってくる。それを拒むこともできるし、恨むこともできる。しかし一度引き受けたとき、人は失う以上に、大きな静けさを得る。のさりととは、人生を理解する力ではなく、人生と並んで立つための態度なのではないだろうか。

<事 例>

クロ現「ミッドライフクライシス」中高年の心の危機 2025/7/9
NHK スペシャル「椎葉山物語 “のさり” の原風景 2026/1/18
こころの時代、ゴ〜ンという音が聞こえたとき、
NHK 時をかけるテレビ「夫婦が挑んだ白夜の大岩壁」2026/1/19
歌・岡林信康「自由への長い旅」岡林 24 歳の時の作詞作曲

円了のホームページ: www.enryo.jp

